玩具映画および映画復元・調査・研究プロジェクト４（通称：玩具映画プロジェクト４）

映画保存と活用に関して１（時代劇映画を中心に）

研究年度・期間：平成18年度

研究ディレクター：太田　米男（映像学科　教授）

共同研究者：中島　貞夫（映像学科　教授）　豊原　正智（芸術計画学科 教授）　犬伏　雅一（芸術計画学科 助教授）　吉川　幸夫（映像学科 助教授）

学外共同研究者：松本　夏樹（芸術計画学科 非常勤講師）　宮島　正弘（映像学科 非常勤講師）　小山　帥人（映像学科 非常勤講師）　安井　喜雄（プラネット映画資料図書館代表）　上倉　庸敬（大阪大学文学部 教授）　石原　香絵（NPO法人映画保存協会副代表）　森脇　清隆（京都府京都文化博物館文芸１課 学芸員主任）　藤岡　幹嗣　須佐見　成（㈱IMAGICAウエストフィルム事業部 部長）　ジョアン・R・バナディ（ロチェスター大学Japanese & Film 准教授）

継続研究である今年のテーマは、これまで収集した玩具映画フィルムをデジタル化して、広く映像を活用して頂くことを優先課題とした。収集本数も多くなり、それらのオリジナル・フィルム（数は限られている）と複製ネガ原版の保存、複製プリント（映写用フィルム）の活用が重要で、今回は時代劇映画に絞って、ビデオ（デジタル）化することを優先して作業を行なった。これまで、消滅しようとしている映画から複製ネガを作成し、映像の延命を図ることを目的としてきたが、450本（玩具映画以外のフィルムも含む）をフィルムで上映するには、まだ環境整備も出来ていない状態で、なかなか見て頂く機会がなかった。そこで、本年度は、まず時代劇映画の複製フィルムからテレシネ（ビデオ化）して、データ化し、その映像をDVDなどにして活用して頂くことを第一の目的とした。先日（2006年11月～12月）に開催された本学博物館主催の「おもちゃ映画と蓄音機」展では、ビデオ・プロジェクターでの上映と、コンピューター上での検索システムで、時代劇の玩具映画コレクションのすべてを見て頂けるようになった。まずは、最小限の約束を果たしたことになる。

今年度は、新たなフィルムの収集には目立った成果が得られなかったが、それには理由があって、すでに加水分解（ビネガー・シンドローム）というフィルム素材が溶け出した状態で、映写機にもテレシネ機にも通らないという消滅寸前の劣化した16mmフィルムが寄せられた。この映画が戦中に製作され、当時の特撮技術を結集し、軍事的な意味でも重要な映画「海軍爆撃隊」（1940年、東宝映画、木村荘十二監督）であることが判った。この映画は、海軍省後援監修による国策映画で、航空教育映画製作所という軍事教育を専門に製作した東宝の特別班が主体になって製作したため、終戦直後、GHQによる戦犯追及を怖れ、他の機密文書や国策フィルムなどと共に、焼却廃棄され、現存しない歴史上だけのまぼろしの映画であった。だから、映画会社はもちろん、国立フィルムセンター（アメリカからの返還フィルム）にもなく、寄せられた16mmが、この世に現存する唯一のものであることが判った。特に、この映画が「ゴジラ」などで有名な円谷英二の初の特撮監督作品であり、話題性もあった。監督は、この映

画の後、満州へ渡り、映画学校の設立に尽力した木村荘十二、原作・脚本は「マダムと女房」の北村小松、撮影は「広島・長崎の原爆記録」を撮影した三木茂、音楽は「羅生門」や「七人の侍」の早坂文雄という超豪華なスタッフ陣で、東宝の航空戦争映画の第１作であり、何よりも円谷の特撮監督第１作という記念すべき映画であることで、最優先して修復、復元を行うことにした。しかし、１本の映画の復元の費用は100本の玩具映画に匹敵するため、もちろん、当プロジェクト独自では復元できない。そこで、映画「海軍爆撃隊」復元委員会を立ち上げ、国立フィルムセンターや京都映画祭の助成を得て、本プロジェクトが主体になって復元することになった。従来の復元方法では、この溶けたフィルムからは復元できず、仕方なく16 mmのままの複製ネガを作成し、ブローアップして35 mmプリントを作ることになった。消滅寸前の状態で、辛うじて復元に間に合うことが出来た。復元版完成披露は、第5回京都映画祭（10月）で行い、テレビや新聞で報道され、反響もあって、大きな成果を得ることができた。「海軍爆撃隊」のプリントの１本は、本学のコレクションに加える事になった。

映画の復元や保存に関して、海外では映画修復や復元を教える大学もあり活発に行われているが、わが国には学校も講座もない。現在のところ、映画の復元を学ぶには外国へ行く以外に方法はない。また、大阪のIMAGICAウェストが日本で唯一の映画復元専門ラボとなった状況もあり、そこで、映画復元の専門家を育成することが緊急の課題と認識し、当プロジェクトが主体となって「映画の復元と保存に関するワークショップ」を提案した。賛同者もあり、京都府京都文化博物館、プラネット映画資料図書館、IMAGICAウェスト、当プロジェクトが主催し、京都映画祭関連事業として開催できた。本学の学生たちだけでなく、広く門戸を開き、参加者を募ったところ、国立フィルムセンターだけでなく、フィルム会社や現像所、デジタル復元の専門家、日本映画撮影監督協会、日本映画テレビ技術協会、NPO京都映画倶楽部、NPO映画保存協会などの協力を得て、９月２日－15日（２週間）のワークショップを行うことができた。参加者の意識も高く、充実したものになり、毎年継続して開催して行く賛同も得られた。

先述したように、デジタルでの活用は、本学博物館主催の「おもちゃ映画と蓄音機」展での成果もあり、次年度は、国産動画を中心にしたデジタル活用を計画している。玩具映画はすべてサイレント映画であり、上映する上で、音楽伴奏などのイベント性も考える時期にきており、活弁と伴奏など、次の課題も分かってきた。まだまだ、内外へのアピールも弱く、フィルムを収集するにも、当プロジェクトの内容を発信する必要もあり、学外の専門機関とも協力しながら、このプロジェクトを進めて行きたいと考えている。

尚、この４月に東京国立近代美術館フィルムセンターにおいて、「国際フィルム･アーカイブ連盟（FIAF）東京会議2007」が開催され、玩具映画の紹介を依頼されて、発表する機会を得た。これもひとつの成果である。